

# 複雑化する日本の安全保障



Vol.5  
チャイナ・カード (1)

2カ月ほどわき道にそれておりましたので、本題に戻ります。

ニクソン大統領による米国の戦略の修正です。もう50年も前の話です。

当時の流行語に「チャイナ・カード」というものがありました。文字通り、中国にどのように対処するか、中国という大駒をどのように使うか、と

戦計画が存在しない、言ってみれば門構えはあっても奥行きのない同盟関係だったと言えるでしょう。

日本にとっては、極東ソ連軍と中国軍の脅威に対して、在日米軍と自衛隊とで対抗するというのが基本的な考え方でしたから、米国が一方的に「二つの正面で大きな戦争をすることは考えない」と言ったことが大きな問題となりました。米国は中国と戦うことを放棄したのではないかと、日本の防衛も考えなくなるのではないか、といった議論が国会で起こるのですが、当時の野党が「同盟国に対する米国の防衛責任の負担増大の要求」という本音と、「沖繩返還」も含めて、米国が米中関係改善の向こう側にどのような日米軍事関係を模索したのかについて理解していたのかは定かではありません。

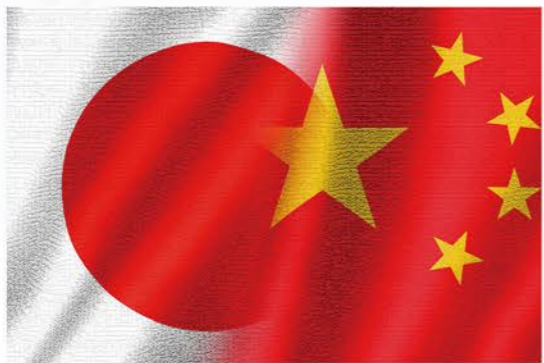
防衛当局者にとっては、先に述べ

いうことです。それまでの西側では、共産主義は疫病のように感染するものだ、と考えられていました。ソ連がその源で、中国にまで広がっていったとみられていたのです。感染の拡大です。さらに広がってヴェトナムにも病原菌が入っていったとみなされたのです。

時間がたつにつれて、共産主義の国の間にも不和があることが分かってきました。特にソ連と中国の間です。共産主義は、伝染病ではなくて風土病だというように認識が変わっていったということでしょう。そこから、中国をソ連に対抗する軸として取り込むことはできないだろうかという発想が生まれました。それが、「チャイナ・カード」の発想の原点です。そのカードを使う、それがニクソンの戦略転換の基本でした。

この時、チャイナ・カードを切るべきだ、と発言していた専門家の一

た基本的な考え方を満たすために、どこまでの防衛力整備が必要か、という頭の痛い問題がありました。いったいどこまでの装備を整えればよいのか、そのための経費はいくらになるのか、という「単純な」難問です。二次防から三次防、そして1972年から四防。5カ年計画の総経費は倍々ゲームを繰り返しています。既にその予兆を察知していた防衛当局者にとっては、高度成長期の自衛官募集の難しさとともに、予算の確



人がマイケル・ビルズベリーでした。「China 2049」という本を出版して「100年マラソン」なる言葉を紹介した人です。



『China 2049 秘密裏に遂行される「世界覇権100年戦略」』  
日経BP社  
マイケル・ビルズベリー (著)  
野中 香方子訳  
定価：2200円(税込)

それまでの日本の防衛戦略はどんな具合だったかというと、自衛隊という組織を立ち上げて、整備してゆくことに追われていました。当時はちょうど第3次の防衛力整備計画(1967年から1971年までの5カ年計画)を進めていたところでした。陸海空の部隊規模がおおむね定まり、装備の近代化を進め始めていました。しかしながら作戦面では圧倒的な米国の軍事力に依存しており、共同作

保は難しい課題でした。特に第一次の石油ショックを経てインフレが進む中で、経費の問題は一層深刻なものとなっていったのです。その後のことについては、来月お話しすることとします。



## 西 正典

Masanori Nishi

1978年東京大学卒業、防衛庁に入庁。那覇防衛施設局長、内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長などを経て2013年防衛事務次官。2015年退官。現在ボストンコンサルティンググループ シニアアドバイザー。